メディシン・インフラ
Medicine Infrastructure
鴻池朋子展
Tomoko Konoike

2024.7.13 sat – 9.29 sun

会場 青森県立美術館とその周辺野外、国立療養所 松丘保養園 社会交流会館

開館時間 ［美術館］9:30–17:00（入館は16:30まで） 休館日 7.22（月）、8.13（火）、8.26（月）、9.9（月）、9.24（火）
［社会交流会館］10:00–16:00 会期中の休館日 毎週月曜日

観覧料 ［美術館］一般 1,500円（1,300円） 高大生 1,000円（800円） 中学生以下無料 ［社会交流会館］無料

セット券／鴻池朋子展＋AOMORI GOKAN アートフェス 2024 かさなりとまじわり 一般 2,000円 高大生 1,200円 小中学生 100円

※（ ）内は20名以上の団体料金。9月1日までAOMORI GOKAN アートフェス 2024 公式ガイドブック特典「スタンプラリー＆パスポート」割引料金。
※ 心身に障がいのある方と付添者1名は無料。 ※ セット券に団体割引はございません。また他の割引との併用はできませんのでご了承ください。
会期終了後に展示作品の一部を県民の森梵珠山 六角堂休憩所に展示（10月初旬から12月末日予定）。詳細は美術館Webページで公表します。

主催 鴻池朋子展実行委員会（青森県立美術館、青森朝日放送、青森県観光国際交流機構）
後援 青森ケーブルテレビ、エフエム青森、東奥日報社、デーリー東北新聞社、陸奥新報社、青森県教育委員会、青森市教育委員会
協力 ハンズクラフト秋田

青森県立美術館
AOMORI MUSEUM OF ART

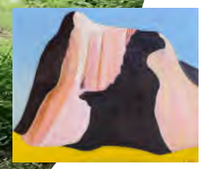
サテライト会場

国立療養所 松丘保養園 社会交流会館

開館時間 10:00–16:00
会期中の休館日 毎週月曜日
観覧無料

美術館と梵珠山の間、緑豊かな地にある松丘保養園は、
国のハンセン病隔離政策により1909年に創立されました。松丘の成瀬豊（菊池恵楓園絵画クラブ「金陽会」発足メンバー）の作品と金陽会作品約30点が再び交わるほか、鴻池の《物語るテーブルランナー in 大島青松園》、新城中学校美術部や北中学校総合文化部員とが《美術館ロッジ》で制作した梵珠山 六角堂休憩所の皮絵、木下直之によるノート公開やお話、山川冬樹のライブパフォーマンスなど、療養所から今も生み出される創作の数々をご紹介します。

成瀬豊《叫び》（1950年代後半–60年代）
作品所蔵／画像提供 国立ハンセン病資料館


森繁美《黒の山》（2003年）
国立療養所菊池恵楓園歴史資料館蔵

関連イベント

青森県立美術館

旅する学芸員と指人形一座
7月13日（土）10:00–12:00（随時）
ファシリテーター 石田智子・福田千恵（高松市美術館）

オープニングトーク
7月13日（土）13:30–15:00
出演 指人形、鴻池朋子、奥脇嵩大（本展担当学芸員）

筆談ダンス
8月10日（土）10:00–11:30
出演 木下知威（歴史家／障害史・建築学）、鴻池朋子

真夏の中間トーク
8月24日（土）10:00–11:30
出演 指人形、鴻池朋子、奥脇嵩大

●いずれも参加無料
（ただし企画展チケットが必要です）
●いずれも事前申込不要
時間までに美術館1階総合案内横「エントランスギャラリー」にご集合ください。集合後、会場まで誘導します。

国立療養所 松丘保養園 社会交流会館

115回目の夏
8月24日（土）15:00–17:00
山川冬樹（アーティスト）と鴻池朋子がライブパフォーマンス、朗読、トークを行います。

お話
8月25日（日）10:00–12:00
お話 ・「金陽会と旅をして」
藏座江美（旅するキュレーター）
・「こうのいけともこと旅をして」
木下直之（静岡県立美術館館長）
お話の後、鴻池朋子を交えての鼎談

●いずれも参加無料
●事前申込不要
時間までに社会交流会館にご集合ください。

8月の逗留執筆
木下知威が県立美術館と社会交流会館で随時公開執筆と筆談をいたします。具体的な期間は美術館 Web ページ等にて告知いたします。

アクセス

青森県立美術館 青森市安田字近野185
○ JR 新青森駅から車で約10分、徒歩約40分
○ 青森駅から車で約20分
○ 青森空港から車で約20分
○ 東北縦貫自動車道青森 I.C. から車で約5分
○［八戸方面から］青森自動車道青森中央 I.C. から車で約10分
○ 青森市営バス 青森駅前（6番のりば）「三内丸山遺跡行き」乗車～「県立美術館前」下車（所要時間約20分）
○ ルートバスねぶたん号 JR 新青森駅東口（3番のりば）乗車～「県立美術館前」下車（所要時間約10分）

国立療養所 松丘保養園 社会交流会館 青森市石江字平山19
○ JR 新青森駅から車で約5分、徒歩約15分
○ 青森市営バス 新青森駅南口「西部営業所行き」乗車～「松丘保養園前」下車、徒歩約7分（合計所要時間約10分）
○ 青森県立美術館から車で約10分

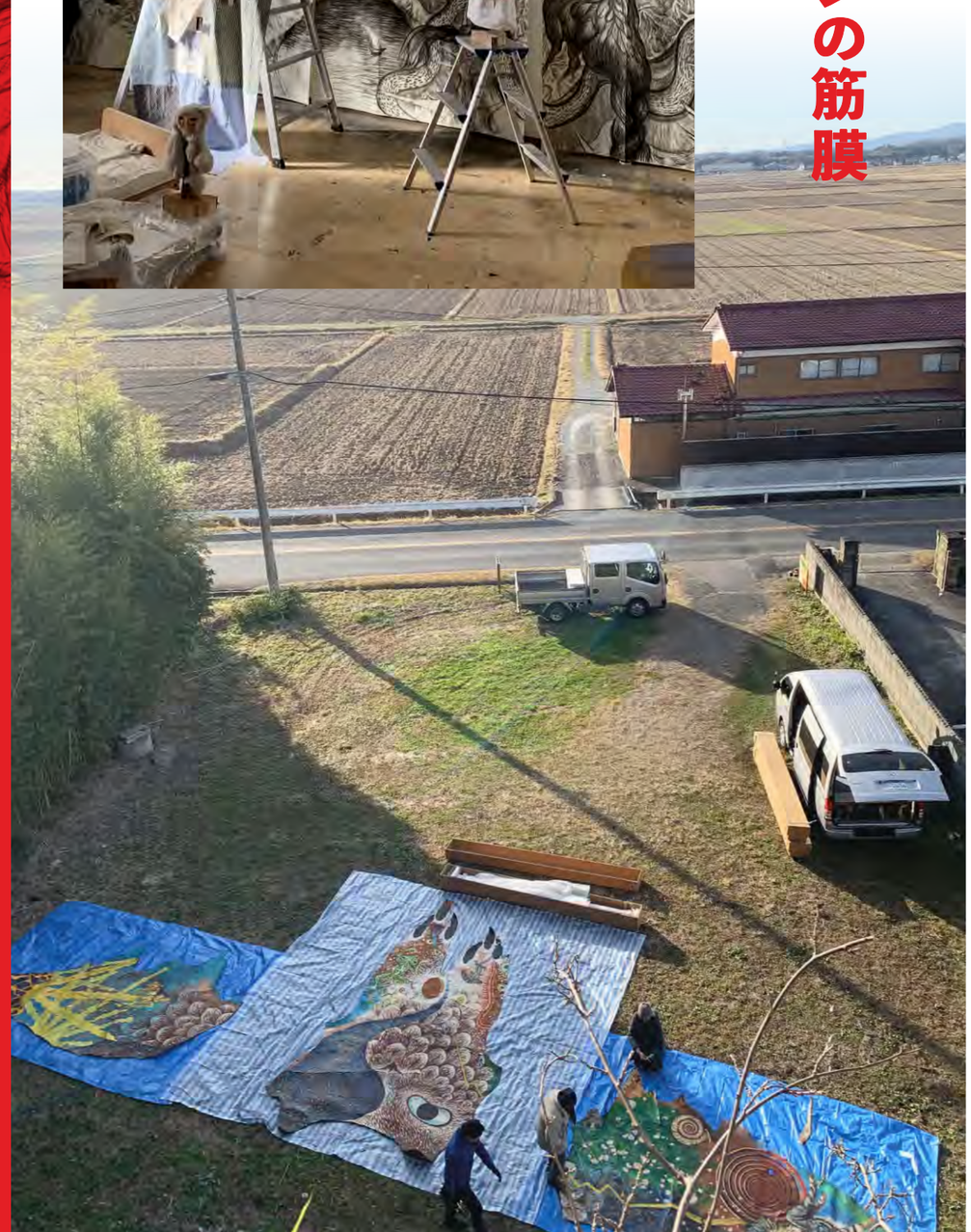
同時期開催

AOMORI GOKAN アートフェス 2024 かさなりとまじわり※
－9月29日（日） ※セット券または別途観覧料が必要です。

鴻池朋子展実行委員会
〒038-0021 青森市安田字近野185 青森県立美術館内
Tomoko Konoike Exhibition Executive Committee
Aomori Museum of Art 185 Chikano, Yasuta, Aomori City 038-0021
tel.017-783-3000 fax.017-783-5244

「鴻池朋子展 メディシン・インフラ」最新情報↓
青森県立美術館ホームページ www.aomori-museum.jp
公式 X twitter.com/aomorikenbi/
公式インスタグラム www.instagram.com/aomorikenbi/

メディシンの筋膜



新しい先生は毎回生まれる

プロジェクト・ラボ

鴻池とその作品が媒介となり、様々な分野の方が独自の作品やワークショップ、研究を展開しています。そのユニークな活動を発表していただく画期的なアートラボです。一人ひとりが全部違う身体センサーをもって作品を感じていることが見えてきます。

〈参加者〉
福住廉・矢野智司・吉川耕太郎・
石倉敏明・尾花賢一・村井まや子・
木下知威・杉田竜平・藏座江美・
坂本里英子・山口未花子・藤沢レオ・
長谷川拓郎・細矢芳・福田千恵・
石田智子・毛利直子・奥脇嵩大

回転し鞭打ち

鴻池朋子の身体は東日本大震災以降、地球の振動を新たな画材と感じ、旅をしては
野外の技法を習得し、時に土木工事や縫いものをメディアに「絵」を描いてきました。
昨年より東北でスタートした《メディシン・インフラ（薬の道）》は、鴻池が各地を巡り、
縁のあった場所に自作を展示保管してもらう長期的なプロジェクトで、その活動は
福島、岩手、北海道へと少しずつ広がってきています。現在も能登半島地震の被災地の仮設住宅に
設置されるカーテン作品を制作中ですが、その住宅も大切な場の一つとなることでしょう。
今回、移動する動物のごとき鴻池から「地図帳やランドマーク」の役目を託された青森県立美術館。
そこには新作や現地レポートを通じて、観客に鴻池の軌跡をリレーする充実した中継ぎ役が求められているようです。
「作家やアーティストのようにメッセージや問いを投げかけるのではなく、後はもう自分の体しかない、
というギリギリのところまで連れだしたい」と語る鴻池。観客の体がその場に晒された時、アートが人間の
本能的なものに向けて、豊かに染み渡るメディシン（薬草）のように機能していくのではないでしょうか。

Since the Great East Japan Earthquake, Tomoko Konoike's body has felt the vibrations of the earth as a new painting medium, and she has traveled and mastered outdoor techniques, sometimes using public works and sewing as media for her "paintings". "Medicine Infrastructure" which started last year in Tohoku, is a long-term project in which Konoike travels around the region and exhibits and stores her own works in places where she has a connection. She is currently working on a curtain work to install in temporary housing in the 2024 Noto Peninsula Earthquake-stricken area. It will be one of the most important places. Aomori Museum of Art has been entrusted with the role of "map book or landmark" by Konoike who is like a moving animal. Her request to the museum seems to reflect her thought that it will serve as a fulfilling intermediary to relay her traces to the audience through her new works and field reports. Konoike says, "I don't want to throw out messages or questions like a writer or an artist, but I want to take the audience to the very edge, where all that is left is their own bodies". When their body is exposed to this scene, the art will function like a richly care for the human instincts.